酷すぎる……ウジ虫、ゴキブリ、血の海……

「自殺の後始末」が激白

これが自殺現場の〝現実〟だ！

現代日本では自殺もタダではない。
自殺すればその後処理が必要になる。
それを職業とし、様々な自殺現場を見てきた男が、
そのあまりにも悲惨な現実を語る

いたるところにウジが蠢く壮絶な腐乱死体現場。遺体から流れた体液が亡くなった時の形にくっきりと残っていた

首吊りの現場

死ぬ人間からすれば後のことなど関係ないかもしれないが、残された者こそ「悲劇」だといわれる。遺品整理専門会社「キーパーズ」は故人の遺品整理や荷物の処分などが主たる業務だが、自殺の専門業者が存在しないため、彼らが薬をすがるような思いで頼ってくることも少なくない。知られざる「自殺の後始末」を吉田太一代表取締役社長が明かしてくれた。

「少し前は練炭自殺が多かったけど最近はやはり硫化水素。つい先日も現場に行ってきました。ただ、全体ではやはり首吊りが一番多いですね。どこでもできるということもあるのでしょう。珍しいのでは、洗面台の蛇口にヒモをかけて座った状態というのがありました。普通に考えれば、ちょっと腰を浮かせば助かる高さですが睡眠薬を飲んで意識を朦朧にして紐を首に食い込ませてしまったりしているうちに亡くなってしまったのです」

首吊り自殺は死後、肛門や膀胱の筋肉が弛緩して脱糞や放尿して床が酷い状況になっているといわれるが、吉田氏によるとそうとは必ずしもそうではないという。

「少し前、都内某所でまだ20代の女性が首吊りをした現場に行きました。死後一ヶ月というかなりの腐乱していえるだろうと覚悟していたんですが、まったく臭くない。室内のドアの上に紐をかけたのですが床に失禁したのか数滴の染みがあるぐらい。死に顔もきれいで、警察の人も首を傾げていました。その人の体質や部屋の日当りなどで腐乱の施行度合いも違います。あと、クーラーがつけっぱなしで死ぬとウジはわかない。ただ、逆に匂いが室内全体にへばりつきますがね」

リストカットの現場

首吊りの次に多いのが、リストカットなど刃物をもちいる自殺。一面血の海になり死にきれない場合ははいずりまわった痕跡が残ったりと、かなり凄惨な現場だが意外にも処理はそれほど手間はかからない。

「血は乾燥するのでパリパリになるので掃除しやすい。雑巾を湿らして吹くだけでもきれいになります。ただ、フローリングの隙間などに入ってしまうと匂いが残るのでこれはリフォームをしないといけませんね」

現在続発する硫化水素自殺は周辺に「二次被害」を生み出すため後処理どころの騒ぎではないが、それを除けば、自殺の後始末に大きな差はないが、問題はどのような死に方でも発見が遅れて時間が経過してしまった場合、つまり腐乱死体だ。

「一般的な賃貸物件で普通に亡くなった場合、遺品整理と室内の清掃で費用は2～30万ですが変死状況はだいたいそれの1、5倍かかってしまいます」

さらに処理が困難なのが「死臭」だ。腐乱した遺体から流れた体液、血液などが発する独特の匂いは壁や床にこびりついたらなかなかおちない。そこでキーパーズでは、専用のオゾン消臭器を現場に設置する。

「窓やドア、換気扇も密封して2週間稼働すればだいたいの腐乱現場でも死臭がとれる。これが1日2万5千円で2週間で35万円。これにさらに除霊などもおこなえば、自殺して遺体が腐った場合、後始末としては遺族にはおよそ70万近い負担になる」

そう聞けばどこか高額な気もするが、この「死臭」というのはとても素人では除去することのできない代物である。

実は今回、編集部もキーパーズの作業に同行し、死後一ヶ月後に発見された女性の部屋を訪れて死臭を体験してみたが、獣の匂いとロウソクの匂いと腐臭が混じり合ったような、今まで経験したことのない強烈な匂いだった。1時間ほど現場にいただけで衣類から身体、鼻孔の奥までこびりつき、しばらく食欲もわかなかったほどだ。

これは隣人や大家からすればたまったものではない、遺族に一刻も早く消し去れとなじることもあるだろう。それを解決してくれるなら、35万円は決して高くはないかもしれない。

さらに、これはかなり特殊なケースだが、自動車のエンジンをかけて排気を車内にとりこむガス自殺の場合などはあかるい後処理は困難を極めるという。

「夏場で車内は80度ぐらいになってたので遺体は一日で腐るので、車内は壮絶な状況になっていました。公園内に停めて亡くなっていたので、すぐに撤去しろといわれたらしく、どうすればいいのかとうちを頼ったのですが、現場に行くと遺族は車のそばで泣き崩れていました」

飛び降りの現場

そんな数多くの自殺現場を見てきた吉田氏が見てきたなかでも印象に残る壮絶な現場は、60歳ほどのある男性の死に様だという。

まっすぐ歩けなくなった病気になって精神的にまいっていた男性は、ある日、妻が買物に行っている時、ツッパリ棒に紐をかけて首つりをこころみるが、棒が折れて床に顔面から落ちた。そこで今度は台所に行って包丁で首を刺しはじめる。

「一本じゃ死ねなくて二本、三本と刺したんです。その途中で包丁刺したまま玄関に行ってるんですよね。あそこでカギかけんな忘れたと思ったんでしょうね。そこにちょうどお母さんが帰ってきて、カギがかかっとるのでおかしいと警察に通報した。普通はそこであきらめるけど、その人はそこで、このままでは邪魔されるぅ〜と思ったんでしょう、包丁を頭に刺したまま8階から飛び降りたんです。首吊り、包丁、飛び降りと三種類。これほど痛い死に方はない。でも現場の床に顔面から落ちた時の前歯が二本ぽろんと転がっとるのを見て、私にはそれが一番痛そうに感じました」

自殺だけではなく、遺品整理で独居老人の孤独死などの現場も目の当たりにしてきた吉田氏は、もしものときに「後始末」をしてくれる誰かに見つけてもらう環境をつくることが大事と言う。

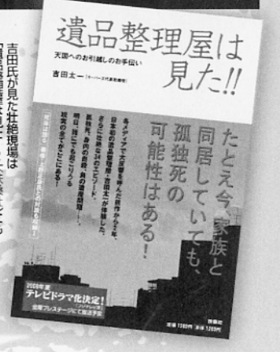
「天国から自分の亡骸を見て、やがて顔が腐ってゴキブリが口から這い出て、耳からウジがでている。それをよけようと思ってもも手を動かせない。これほど悲しいことはないし、今まで生きてきたどんな辛いことの比にならないほどショックでしょう。血の海のなかで亡くなっていた人が遺書のなかで〝掃除する方に申し訳ない〟と書いてあったことがありました。そこまで後のことを考えられる人なら、死なくてもいいのに思いましたよ」

どんな死でもかならず誰かに「後始末」をしてもらわなくてはいけない。死にたい死にたいという人は立ち止まって、それを考えてみて欲しい。

文●編集部

吉田太一「キーパーズ」代表取締役社長
1964年、大阪市生まれ。飲食店、佐川急便、運送業、リサイクルショップを経て2002年、全国初の遺品整理専門会社「キーパーズ」を設立。「遺品整理屋は見た！」（扶桑社）がベストセラーに。6月10日に続編を刊行、8月には堺井武夫が本人を演じてドラマ化される（撮影＝小松寛之）

「キーパーズ」の倉庫に預る膨大な数の「遺品」。個別を抜いて合同供養をした後、処分される（撮影＝小松寛之）



吉田氏が見た壮絶現場は「遺品整理屋は見た！2」（扶桑社）にも収録されている。

やっぱりタダでは死ねない…自殺後処理の『コスト』

首つり	35万円	自動車排気ガス	000万円（車両処理代行含む）
リストカット	35万円		
練炭自殺	35万円	自殺後に腐乱	70万円
硫化水素	35万円		

＋周囲の健康被害による

注：賃貸ワンルームマンションが現場で遺族が大家に現状回復を迫られた実費

それでも自殺できますか……？自殺

020-031 自殺.indd 26-27 08.5.22 4:13:18 PM